



大震災から10年・交流の記憶⑦

ここだけにある資源を通して発信する 魅力ある「地元」を作るために

田村さんは、広野町にあった工場で木材加工の作業中震災に遭遇した。これまで経験したことのない大きな揺れに危険を感じた。消防団としての使命感から、まずは町民を助けに行かなければと思い、すぐさま救助に向かった。

震災後は四倉町の応急仮設住宅で管理人を務めていた。ここには、津波被害に遭ったいわき市の住民も入居していたが、広野町民を温かく受け入れてくれた。しかし、仮設住宅の管理人をしていると、いわきにも様々な影響が出ていることを知った。「いわきに受け入れてもらっているばかりで何もできていない」と感じ、当時取材を受けるたびに被災したいわき市民の現状も伝えるようにしていた。お互いを理解する心掛けを続けた結果、次第に四倉町内の炊き出しやお祭りなどにも一緒に参加するようになるなど、関係がより深まった。

2019年、広野町振興公社より声が掛かり、バナナ事業に携わることとなった。農業は未経験だったが、固定概念がないせいかアイデアが次々と浮かんできた。そして、自分たちのやり

方で自慢のバナナが完成。県内外で行われるイベントにも参加し、広野町の元気をアピールしている。「ここでの交流は始めたばかりですが、いわきの人たちにも気軽に来館してもらい、イベントなどを一緒にやっていきたいです。」

「地元」を活気づけるために、 団結していきたい

令和元年東日本台風の際には、断水の被害にあったいわきの人のために、田村さんの勤務先がある二ツ沼総合公園内の水道を開放した。多くの人が「ありがと」と言ってもらえた時、ようやく震災時にお世話になったいわきに恩返しできたと感じたという。

現在はいわき市湯本町に住み、風情のある街並みにとても愛着を感じている。今では広野も湯本も「地元」だと思っている。

「自分たちの地元を活気づけるためには、一人ひとりでではなく皆で団結することが大事。1つの大きな目標に向かって何年かかってもいい、次の世代へと繋いでいくのもいいのではないかと優しい笑顔で話してくれた。田村さんが育てるバナナ「綺麗」は、広野町の綺麗な自然の中で育ち、広野町の元気を取り戻す復興への誓いが込められている。」



株式会社広野町振興公社
トロピカルフルーツミュージアム館長

田村 弘一さん

広野町出身。震災時は消防団の分団長を務めていた。実家で営んでいた材木業の4代目だったが、震災の影響により廃業となってしまふ。震災後は応急仮設住宅の管理人をしていたが、広野町振興公社より声がかかり未経験の農業分野へ飛びこみ、広野町の新たな名産品となったバナナの栽培を担っている。